

中央大学特定課題研究費 一研究報告書一

所属	文 学部	身分	教授
氏名	鈴木 直志		
NAME	SUZUKI, Tadashi		

1. 研究課題

（和文） 近世プロイセンにおける軍隊社会

（英文） Military Society in Early Modern Prussia

2. 研究期間

2年間（ 2018～19 年度）

3. 研究の概要（背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600 字程度、英文 50word 程度）

（和文）

軍隊社会（軍隊とこれに直接・間接に関わる一群の人々）の実態の解明は、軍事史のみならず社会史や文化史においても意義を有するが、わが国の研究は途についたばかりである。本研究は、近世プロイセン軍を対象にこのテーマを考察するものである。申請者は2017年に「連隊簿からみた近世プロイセン軍隊社会（上）－1792年の歩兵第三連隊の事例」を本学『紀要』（史学）第62号に発表し、1800名におよぶ同連隊の兵卒について詳細に分析した。

本研究の第一の課題はドイツで資料収集を行いつつ、連隊簿の分析を完成させることであった。研究結果は『紀要』（史学）第64号に上記論文の下編として寄稿することができた。そこでは下士官147人および将校57人の年齢、勤務年数、宗派、出身地、既婚率について調査した。本稿で提示した論点のうちとりわけ強調したいのは、長い間通説であったデュッシュの有名なテーゼ、すなわち「農場領主と連隊将校が同郷で、両者相俟って農民＝兵士に鞭打ってプロイセンの権威主義的社会を作り上げた」とするテーゼが、まったく通用しないということである。分析から明らかになったのはむしろ、歩兵第三連隊の将校が土着性のかかなり薄い、その意味で近代的な軍事官僚であることだった。

もう一つの研究課題である、歩兵隊規定などの規範史料を基にした、兵士の生活世界としての軍隊の解明については、ポリツァイと関連づけた論考を現在準備している。

（英文）

The aim of this research is to consider the military society of the old prussian army, using data on soldiers listed on the muster roll (1792) of the 3rd infantry regiment stationed in Halle an der Saale. The results reveal that the officers of this regiment were almost not local nobility in their conscription district, in that sense, a modern military bureaucracy. The fact upset the long accepted famous theory of Otto Büsch.